

ボロボロの「労働青年部」 11月21日おいかげオルグの実態

「本部」反動暴力集団は11月21日、動労本部青年部の名を僭称し約四五〇名余の動員をもって、勝浦、銚子を除く動労千葉各支部へ入り込んできました。反動分子の組織破壊策動は完全に破産しました。革マル分子以外は一対何のために千葉に来たのか判然としないというテイタラクの組織破壊集団の姿を目のあたりにした組合員はこの間の動労千葉の闘いにますます確信を深めています。

闘いに確信をもてないみじめな集団

本紙前号で明らかにしたように、動労八嶽執行部は発足以来、労働組合として何等ともな運動もせず、ただただ革マルの外郭団体化の道をひた走っているばかりであります。11月21日動労千葉各支部に現れた「オルグ団」の姿も、まさに現在の「動労」のそのような運動を体現する以外のなにもでもありません。

11時15分頃、反動暴力集団の手先になり下った塩谷を先頭とする三五名が津田沼支部へ現われたのを最初に、各支部へ入った「オルグ団」は一樣に消耗し切った表情、態度をかくしようもなく、二、三名の目を血走らせた革マル分子に叱咤激励されつつノロノロと動きまわるだけで全く元気がありません。

前日(11月20日)に、何の確信もないまま、ただ組合指令だからということだけで「水本集会」に狩り出され、続いて千葉へ引きづられて来た動員者が消耗するのはけだし当然だといえます。

「セクト的引きまわし」そのもの

この「オルグ団」の姿の中に、われわれは「11・20水本集会」に引き出された動労組合員の心情をはっきりと見る事ができます。

動労「本部」は「水本集会」のためのピラを作り総武線の電車の中へソツと置いてゆくという枯息な策動をしています。そのピラの中にも「消耗した「本部」反動暴力集団の姿」がはっきりと示されています。それは「冤罪」を前面に出し、「水本」という字をできるだけ小さく目立たないようにするという「配慮」が見え見えのものであり、自らの「謀殺」「死体スリカエ」という主張に全く確信が持てないまま、セクト的延命のためにもみ、組合費を湯水のごとく浪費し、動労組合員を引きまわすという反動暴力集団の本質をそのまま体現したものとされています。

そのような「水本」の延長上に、またまた確信もてない「千葉オルグ」を強制された全国のまじめな「青年部員」の心情は「あわれ」としか言いようがありません。

弁護士まで引きつれた暴力分子

「本部」反動暴力集団は幕張支部に対しては「

自信と確信をもって動労千葉の道を邁進しよう!

この東千葉駅に現れた集団こそはボロボロになった「動労青年部」の姿をそのまま示す以外のなものでもありません。

「シュプレヒコール」の音頭をとる革マル分子・伊藤は自らの確信のなさをそのままに口ごもり、「あー」「あー」を繰り返して、自分の消耗感を輩下に転化するかのよう何度も何度も「元気をだして……」と「気合」をかけ、後に居ならぶ動員者は「どうでもいいや」というようにフテクサレ、蚊の鳴くような「シュプレヒコール」も、「お前たちの10・21反戦闘争は何だ。日曜日の昼休みに29分集会なんてアリバイそのものじゃないか」という動労千葉からの怒りの声一発でシュンとしてしまう有様です。

動員者の間を焦りかられて動きまわっていた村上、島田、室井、三浦などの革マル分子はたまりかねて、電車の来る10分も前に部隊を動労千葉会館の前から移動させて逃げてしまいました。

全組合員のみなさん。これが「本部」反動暴力集団の今日の実態です。

自信と確信をさらに深め、動労千葉の道を邁進しようではありませんか。